Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞Nicolò Gaj, Unity and Fragmentation in Psychology : The philosophical and methodological roots of the discipline, London and New York, Routledge(2016)
Author(s)	右田, 晃一
Citation	年報人間科学. 2020, 41, p. 145-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75383
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈書評〉

Nicolò Gaj
Unity and Fragmentation in Psychology:The philosophical and methodological roots of the discipline
London and New York:Routledge(2016)

右田 晃一

はじめに

「心理学の過去は長いが、その歴史は短い」とは、記憶心理学者Ebbinghaus(1908)の有名な言葉である。心理学が哲学から分化したとされる1879年のWundtによる心理学実験室の設立以前に[1)]、人間心理の描写と考察は哲学者によって多くなされてきたのだ。だが、他の科学に比べて哲学から分離したのが遅かったのもあり、その時点で心理学が確固たる領域や世俗と他の学問からの自律性を持っていたわけではない。その発端からして、確立された方法論はなく知見を束ねる機構などにも問題があったということだ。実際に、1879年から半世紀も経たないうちに、著名な心理学者であるVygotsky(1927/1997)が「心理学の危機の歴史的意味：方法論的探究*(The historical meaning of psychology : methodological investigation)*」やBühler(1927)が「心理学の危機(*Die Krise der Psychologie*」という本を出していることに著者は注目している。心理学が発足してからすぐに様々な領域へと研究が分化し、しかも互いに連携せずに各々の方法論で研究を推し進めるという「危機、すなわち断片化」があったということだ。

つまり、正確には「諸」心理学といったほうが正しいくらいに、現在でも心理学は様々な領域或いは部門(branch)を持っている。アメリカの心理学の母体であるAPA(American Psychological Association: アメリ心理学学会)に加盟している団体でも56、日本の心理学諸学会連合でも加盟している団体は50を超えている。さて、このような現状で本書のタイトルにもある「統合」(unity)とは何を意味するのであろうか。

本書の著者と概要

著者はイタリア、ミラノのサン・ラッファエーレ病院の臨床心理士であり、また、同じくミラノ・カトリック大学の哲学的心理学リサーチユニットの構成員である。著者は臨床心理学者であることから、本書は実践寄りの視点で考察される。しかし、本書はよくある理論と実践を単純に対立づけて考察するということをしているだけではない。本書には心理学の分裂をもたらした様々な対立軸が、危機を感じている他の心理学者の引用とともに描かれているのだ。その中でも、重要な軸がmonist vs dualist(時にpluralist)、

つまり、心理学が自然科学を模範として単一の方法論を採用するか、二元的或いは多元的な方法論を設定するかの問題と、それに対応付けられた統語論的(syntactic) vs意味論的(semantics)という軸である。これが一般的vs特定的側面(General vs Particular aspect)などの観点に関連付けて述べられる。本書は13章からなるが、以下、著者の主張がまとめられている5章と11章を中心に紹介していきたい。

心理学の断片化（5 章）

冒頭で述べたように、心理学は学問としての発足時から断片化の問題が存在した。それ故に、心理学の境界・限界・構造とは何かということが議論され続けてきた。だが、unityの対義語であるdisunityとは結局のところ何であるのか。その問いに対して著者は様々な心理学者による様々な観点からの分析を紹介している。そこには学術的な要因だけでなく政治的、歴史的、教育的要因も描かれている。だが、要因が多過ぎる故か、断片化の定義づけは困難であるとも述べる。しかし、心理学は、本質的に人間の企て(enterprise)であり、「社会文化的な現象」であると著者は断言する。それを証明するために、この章の序盤は、イタリアにおける、科学者としての心理学者と実践家としての心理学者という職業上の問題に着目する。そして、職業的・介入的役割を持つ心理学者かつ実践家が前者を社会的に表象していく、という議論を展開していく。ここではイタリアに特殊な事情が述べられているが、Danziger（1997）[1)]の考察でも実践が心理学の社会的イメージや学問化に与える影響は述べられている。すなわち、学校教育や軍隊における検査の合理化を促すための知能検査という「テクノロジー」が心理学において重要な役割をもたらしたのだという。その点で、筆者の主張は特異なものではない。

話をイタリアに戻そう。著者によれば、心理学の実践、職業的な「サービス」は顧客の需要に答えなければならず、勿論、それは社会文化的に規定される。社会の需要や要請に応えていくことは様々な介入の場に介入することを意味し、そして、その心理学的介入によりセクター化（sectorization）が進む。しかも、このセクター化は介入の現場を共有するという職業上の合意を意味するものではなく、それらのセクターは学校や組織などの領域に特化し自律した様々な心理学の領域として発展し、その領域に特殊な対象や方法を適用するようになる。ここで著者は「弊害」が発生するという。それは、断片化もそうなのであるが、各領域で用いられる概念が日常常識に根差した対象に基づくものであり、科学に特有の理論語としての心理学的構成概念（psychological construct）に基づくものでなかったということである。評者は、この問題は心の哲学や心理学の哲学における素朴心理学（folk psychology）の問題に連なるものだと考える。心理学の科学性を追求するならば常識や日常生活に基づいた語や概念は心理学には不要である、という見解もあるのである。また、著者も、常識や日常生活に基づいた語や概念は学問において空虚になりがちである、と述べている。

話は再び断片化に戻る。断片化は定義できないと著者が叙述しているということは前述したが、断片化には種類がある。ここでは、APAの前会長であった10章で述べられるSternbergらの議論に関連させて論じよう。Sternbergらはまず、過去に失敗に終わった「グランドセオリー」[2)]と比較し、心理学にinter-

levelの理論、すなわち、現象を別々のレベルから分析した理論の必要性を指摘する。単一かつ基礎的な現象を別々の方法論からアプローチすることで、それぞれの方法論の「バイアス」を免れた現象の分析が可能になるということだ。そして、概念的なレベルで“theory knitting”、すなわち新しい理論を概念的に「編み出す」ことで、統合を果たすことを提案する。これは方法論的・理論的な側面からの統合であり、方法論については多元的な方法論を擁護していることになる。また、彼らは組織的な側面にも注目する。各部門が単一のパラダイム[3)]に固執し、またその成員がそこにアイデンティティを感じてしまっている現状があり、共通の関心ごとを持っていないことを懸念しているということだ。

断片化された臨床心理学（11 章）

本稿冒頭で心理学の一般的な成立は1879年であると述べたが、臨床心理学が一般に成立したとされるのは、Witmerが心理クリニックを開設した1896年である。Witmerは基礎心理学から得られる知識の限界を乗り越え、それを現実の文脈に適用する意図を持っていた。そこには方法論的・理論的問題があったのにもかかわらず、社会的な需要と緊急性があり、第二次世界大戦後に臨床心理学は多大な発展を遂げた。しかし、その需要のせいで学問自体について、また、方法論について十分な思慮がなされず、また、心理学者への応用への教育、つまり臨床心理士[4)]に育て上げることが十分になされなかったと著者は指摘する。実際に、アメリカでは臨床心理学者たちが方法論と組織的な問題でAPAと対抗する場合があったし、臨床心理学系統の学会も分離統合を繰り返す傾向にもあった。

アメリカでは1949年のボルダー会議で、いわゆる科学者―実践家モデルが採用されることになる。このモデルでは、臨床心理士は「科学的な」心理学の知識を実践に用いらなくてはならず、また、研究と実践の双方に従事しなくてはならない。しかし、このモデルは結局のところ、心理学以上に臨床心理学にとって大きな問題となっていく。つまり、イタリアでは、研究ではなく心理療法の実践こそが実践家らのアイデンティティとなっていくが、異なるアプローチを持つ実践家は相互に孤立する事態にあったという。この事態は1990年代には解消に向かう。すなわち、単一の流派や療法では様々な事態に対応しきれなくなったことを踏まえて、「証拠に基づきマニュアル化した処遇」、および、セラピスト―クライエント間の関係が重要だということが認識され、統合・折衷的な心理療法が用いられるようになったのだ。

ところが、著者によればこのことがむしろ断片化を推し進めるように働いたという。アメリカではボルダーモデルに基づいた教育がなされているが、臨床心理士の実践はあくまでも地域的な営みであり、実践においては研究の知識を当てはめるだけの「消費者」だという反対があった。また、イタリアでも、臨床心理士になるためには、心理療法のフリースクールに通わなければいけない。それ故、ここにも、研究から導き出された一般性vs実践における個人という特定性、という二項対立が顕れる。著者は、結局、「臨床心理学とは何か」、という命題に行き着くが、アメリカ(APA)型の心理的苦痛の説明・解釈・再構成・予測・軽減という枠組みとイタリア型の理解と説明に重点を置いた枠組みから、二つの「文化」を見出すことになる。

科学・職業としての心理学

著者は12章でイタリアの心理学者に対して独自の質問紙を送り、その回答に書かれた単語の解析を基に、統計的手法によってイタリアの心理学者に５つのクラスターを見出すことに成功する。著者はこの研究は普遍化は困難であると述べるが、この研究とそれまでの章で自身が引用をしてきた見解を考察し、13章で結論としてまとめている。極端に単純化した言葉では、実践家は思慮なき実践をし、理論家は実践抜きに理論化する、と結論するのだ。すなわち、理論家に関しては科学性に固執するあまり個別的な実践に関しての理論化をせず、また、データ収集に力を入れるあまり、それと理論構築の過程における概念化や哲学的な道具立ての利用との間に非対称性が出てしまっているという。それを受けてRychlack(2005)が述べる、過度に強調され単純化された科学的な方法論に固執することない「科学に何が含まれているかの洗練された理解」をしていくことを促す。実践家に関しては、科学的方法の誤った概念化や利用が常態化していると指摘し、逆に主観的方法に過度に自信を持っていると警告する。つまり、彼らは統計的手法に反感を持ちがちであるが、少なくとも、統計は「人間の判断のバイアスを減らす」ことにおいて多大に寄与するのだから、適切に使用しなければならないと述べるのだ。

著者の結論として、対立軸を整理しまとめると以下のようになる。心理学の目的は人間の状況を改善するために人間や動物の振る舞いについての知識を収集することである。そして、実践家によってもたらされる常識に基づく構成概念は心理学の科学としての正当性を弱め、一方、研究は実践に関わることを拒否すれば心理学の有効性を失わせる。ここに来て、統語論的な規範・一般化に基づく理論によって相互主観性が確保され、意味論的な個性記述的・個別化が実践によってもたらされるという、協調的で補完的な関係が出来上がる。そして、こういった方法論が心理学の内容と境界を定めていく。ただし、統合が最終的な目標ではなく真理が学問の目標であると結論付ける。

まとめと議論

著者は最終章のまとめにおいて、6〜10章で扱った心理学者による提案を、前述した対立軸、特に主観/客観、理論/実践の軸と12章で見出したクラスターを対応付けすることで批評しなおしている。実践家ならではの視点で、主に二項対立を軸に考察を重ねていく筆者のスタイルは斬新かつ重要な視点であるし、統合も望まれるものだと考える。しかし、評者は以下の点について本書に疑問を感じたので、最後にそれを論じる。

まず、筆者がCarnap(1950)を参照して統合を議論する箇所があるが、Carnapが掲げたのが「統一科学」であり、特定の学問の枠内での統合を対象にしているという訳ではないことである。それと関連するのが、心理学がそもそも科学である/ありうるかどうか、という問いである。これは、Staats(1983)[2]が述べているように、心理学自体がパラダイム形成の前段階にあり、そもそも成熟した科学とはみなされないという風潮があることと関連する。筆者は基礎心理学から導き出された理論を科学的である、と無条件に前提しているのであるが、心理学の(前)パラダイム性については十分に扱えていないと評者は考える。

また、社会心理学や臨床心理学には基礎心理学のような純粋科学の方法論の模倣をやめ、社会構成主義的に考えていこうという流れもある。そのような中で、基礎心理学の理論自体を統合して実践に応用したり、理論と実践を統合したりする議論の枠組みを具体的に作るのは不可能に近いことであるのではないだろうか。

ともあれ、それらを考えるにも、筆者の言うような心理学的言語の統一が必要不可欠かつ前提条件であろう。そのためには、やはり、心理学者集団において理論と実践を相互に意識しあい、協調関係にならなければ始まらないと評者も考える次第である。

参照文献

[1] Danziger, K.（1997） *NAMING THE MIND: How Psychology found its Language* ,London. Sage Publication

[2] Staats, A.W.（1983）*PSYCHOLOGY'S CRISIS OF DISUNITY : Philosophy and Method for a Unified Science*, New York, Praeger Publishing

註

1）心理学史においては別の歴史観もみられる。ここでは標準的解釈に従う。

2）著者はグラウンドセオリーの例として、精神分析、行動主義、認知主義を挙げている。

3）ここでは「パラダイム」という用語は厳格にはとらえられていない。心理学の前パラダイム性は Statt(1983) を参照のこと。

4）原著では “clinical psychologist” だが、ここでは日本における資格名の臨床心理士ではない。